

欠けたところは

double quarter

テレビにはなんのことはないバラエティー番組が映っている。私と青はそれをこたつに入って見ている。私は青の右側に座りつつ、何か思いついてはいくつか言葉を交わしていた。しかしもう話題の種も尽きかけ、お互いにぼつりぼつりと口を開くのみになっていた。

一人になると途端に話したいことが見つかるのに、こうしているともう十分話し終わつたような気になる。あるいは一人でいるときの物足りなさが話したいことを考えさせるのだろうか。言葉はいろいろな関係なんて言えるほど私と彼は器用ではないが、それでも今こうして安心して黙っていられるのは、きっと信頼のおかげなのだろう。

「……今度さ、一緒に買い物行かない？」

青が藪から棒に切り出す。

「いいけど、これまた突然だね。何かあったっけ？」

「いやその、そろそろ俺たちが付き合い始めて三年だな、と思って」

「そっか、もうそんなに経つんだ」

実は私はその記念日を一週間は前から意識していたが、なんだか気恥ずしくて今気づいたふりをする。

「ほんとは何かサプライズで買おうかとも思ったんだけど、失敗するのが怖くてさ」

青は苦笑いしながらそう言った。

「青が選んでくれたものなら何でも嬉しいけどな。それにそもそもセンスもそんなに悪くないから外さないでしょ」

「ほんとに？」

「ほんとほんと」

何ならサプライズで買ってくれた方が私は嬉しいのだが、こうやって正直に心中を打ち明けてくれるところが私は好きだ。私は引つ張ってくれるタイプが好きだと自負しているが、それでも頼られるのは嫌じゃない。そもそも今回に限らず頼り合っているのはお互い様だし。

「でもまあ……せっかくだし買い物は一緒に行こうか」

私がそう言うとき青は少しほっとしたような顔で頷いた。

話に一区切りがつくと、どちらからともなくグラスに注いだ炭酸飲料をちびちびと飲む。私たちは食べ物と飲み物の好みはかなり近い。食べ物は中華丼が好きで、匂いの強いものが苦手だ。飲み物は甘い炭酸飲料が好きで、お酒が苦手だ。もつともお酒については苦手な理由が二人で違っている。青は単に苦いからジュースの方が美味しいという理由で苦手としている。私はアルコールの摂取が四肢痛を誘発するという話を聞いて以来、なんとなく避けていた。どうやらそれは根拠のある話ではないらしいと後で知ったものの、かといって特に今更飲む理由もなく今に至る。

テレビではカッブルの馴れ初め特集みたいなのをしていた。昔は興味なかったのに、こうして今恋人がいる立場になるとついつい気になってしまう。そしてそれを見ていると自分たちの過去のことを思い出す。先ほどの青の正直のお返しというわけではないが、藪から棒に私も心中を打ち明ける。

「私が青のことを気になり始めたきっかけは、実は最初に会ったときのやりとりだったんだ」

青はテレビに向けていた視線をゆったりとこちらに向けなおして、次を待つような目をした。私は斜め上を見つめ、少し考えながら続ける。

「うまく言えないんだけど、なんていうか、あのとき青は私を腫れ物扱いしなかった」

青はグラスを傾けながら真つすぐ遠くを見るようにして数瞬考えこむ。そしてこう言った。

「そうだなあ。俺も腫れ物扱いされる気持ちを知ってたからだろうなあ」

青は小学校低学年のときに母親を亡くしている。それ以来ずっと周りからは片親と認識されて生きてきた。自分が片親だということを知ると、周りはどことなくこちなく接してくることを知っていた。そしてそれが優しさからくるものだとも知っていた。だが同時に、それらはこちらを憐れむ視線にも見えてしまっていた。悪意などないとわかっているのに、それでも当人からすればそう見えてしまうということを知っていた。

「一つ、そのときの言葉で覚えてるのがあるんだ。『俺にそんなに気を遣わなくてもいいですよ』って」

「今思うと我ながら気障っぽくて恥ずかしいんだけど……」

「なんでさ。君らしい言葉なのに」

私はそう言って笑いかけた。

あのとき私たちは大学の友達同士の集まりに呼ばれて初めて会ったのだった。お互いに友達の友達という関係だったので若干気まずかったのを覚えている。

「初めまして、藤野青と言います」

「こちらこそ初めまして、雨宮凜です」

青のぎこちない挨拶に、思わずこちらまで形式ばった挨拶をしてしまう。妙にペースを乱されている気がしつつも、私は他の人と同じように親睦を深めるべく話し始めた。大学生活のこととか、共通の友達のこととか、最近してることとか。当たり障りのないことをしばらく話していると、少しずつお互いの緊張も解けてきたようだった。

ふと、青の視線がチラッと私の左腕に向かったことに私は気づく。そこには色合いと形が本物の腕にそっくりの義手を取り付けられている。本物と似ているが、それが義手であることはある程度近づけばわかるくらいものだ。左腕を失ってから長い年月で、私はこの種の視線にすぐ気づけるようになっていた。誰だって気になるだろうし、立場が逆なら私だって気になる。だから私はあからさまに気にしていない風に見せるためにこう言った。

「私の左腕、実は義手なんです。肘から先の前腕の部分がそうです。結構本物そっくりでしょう？ 最近の技術はすごいですよ」

私が義手を顔の前くらいの高さまで上げて見せるようにすると、青はそれに数秒目を向け、その後私の目を見据えた。

「凜さんはすごいですね」

「えっと……どの辺が？」

彼から嫌味の雰囲気は感じなかったが、それでも私は何か変なことを言ってしまったのだろうかと思固まる。しかし彼は私のそういう細かい所作には気づく気配がないまま、言葉を選ぶようにゆっくりと答えた。

「すらす言葉が出てくるところとか、初対面でも俺みたいに物怖じすることがないところとか、話しくいことでもきちんと伝えてくれるところとか」

でも、と言って彼は続けた。

「俺にそんなに気を遣わなくてもいいですよ。その、良い人なのはわかりますから」

そう言って彼は少し気恥ずかしそうに笑いかけた。それを言われて私は初めて気づいた。私はこれまで明るく振舞おうと心掛けて、明るい自分を演じていたのだと。

私が左腕を失くしたのは、小学生の頃だった。左腕の痛みで病院に行ったら、精密検査に回されて、骨肉腫だと診断された。そのとき自分がどう感じたのかは覚えていないけど、両親が泣いていたことは覚えている。それを見て私は「大丈夫だよ」と言ってやりたくなった。大丈夫なことなんてなかったのに。

私はよくわかっていなかったが、何やら病状は悪かったらしく、そのうち命を守るために切断を迫られた。両親とよく話して結局切断を決意した。私は右利きだから大丈夫だよ、なんて言ったら母親を余計に泣かせてしまった。

手術の終わりは、苦労の日々の始まりだった。術後の痛みが引く前から、筋肉や関節を動かして、残った腕の部分が動かせるようにした。最初の内は、肘を曲げ伸ばししても前腕の重みがない違和感は怖かった。痛みを乗り越えると、

今度は片手で生活するためのリハビリが始まった。右利きだから大丈夫だと樂觀視していたが、実際にしてみると自分がいかに二本の腕に頼りきりになっていたかがわかった。手術の傷が治り腫れが引いてくると、今度は義手を使う訓練が始まった。肘の動きに対応して稼働する義手を使いこなせるようになる、できることの幅が広がるのがわかった。でも私は見た目を気にして本物の腕に近いものを普段使いすることに決めた。肘が使えるので、意外とそれだけでもできることは多かった。何より自然な義手だと周囲の目が気にならなかった。そのうち私は学校に復帰した。

左腕を失って以来、それを誤魔化すかのように私は努めて明るく振舞った。最初は演技だったかもしれないが、そのうちそれは性格になっていった。私が前向きに生きようとしているのがわかると、両親も元氣になっていった。だから私は周りに笑顔を振りまいた。まだ生きられるとわかったのが嬉しかったから、その笑顔は嘘ではなかった。友達も私の状態に最初は戸惑っていたが、そのうちに慣れていった。むしろ両親よりも友達の方が早く慣れていったように思う。子供の方が適応力があるということかもしれない。

だけど全てが周りと同じようには行かなかった。リハビリのおかげで日常動作の大部分は自分でこなせるようになっていた。しかし身体を動かすことには依然として苦労が伴った。走ることはバランスが崩れやすくて難しかったし、球技も両手が前提の周りと同じく合わせるのは難しかった。そうやってできる運動は限られ、みんなと同じように遊ぶことはできなかった。それが理由で孤立することはなかったけれど、自然と屋内で遊ぶことが増えていった。絵を描くことは今でも趣味の一つだ。

月日は流れ、私は中学高校と進学していった。周りは少しずつ大人になっていた。私も少しずつ大人になってきて、周りの人のことがわかるようになっていた。そのうち、私は人に氣遣われているということに気づいた。それは私にできないことがあれば手を差し伸べてくれる優しさだった。そしてそれを、彼らが私をどこか対等だと思っていなかったことの裏返しだと思えるようになってしまった。

様々な行事で私が他と同じように参加できるように工夫してくれた。私が転んだり躓いたりすると周りは普通よりも動揺した。体育でしばしば私には特別ルールが用意された。両親は私が好きに生きられれば良いと、叱ることもなくなった。

わかっているのだ。それらが全部彼らの優しさの結果であることは。でもそれらはきつと憐みと表裏一体で。私は周りの人にどうしてほしいのか、自分でもわかっていなかった。全てのハンディキャップを無視して両親がある人と同じことをしろと言われたら、私はそれをできない。でも特別扱いされ、一人では何もできない可哀そうな人だと思われるのも嫌だった。たくさん努力して、一人でできることはこんなに増えたのに。そんな矛盾したわがままな願いは叶わないとわかっていたから、私は自分の方を変えようとしたのだろう。周りに心配されるくらいなら、腕のことなんて気にならないくらい明るくなってしまおうと思ったのだ。結果的にそれはある程度の成功を収めた。

大人になるにつれて初対面の機会が増えていく。それに応じて無言の視線の圧力を感じることは増えていった。そのたびに私は上手に明るい性格になっていったのだろう。なるべく可哀想だと思われないように。

そして、青の言葉で本当の願いに気づいた。家族でさえ、いや家族だからこそ私のことは氣遣った。私自身それに甘えていた時期がないわけではない。だけれどそれじゃだめだった。本当の願いはもっとシンプルだった。なくなった腕じゃなくて、私を見てほしかった。表面的に見えている私の身体上の問題は、悩みの原因ではあっても悩みそのものではなかったから。

「あの言葉のおかげで私はちょっと図々しくなってもいいかなって思えた」
「それなら恥をかけた甲斐があったな」

青は左のこめかみの辺りを左手で軽くかきながら笑う。きつと自分でも気づいていないであろう、氣恥ずかしさを誤魔化す仕草だ。

「まあ凛はもうちょっと図々しくてもいいくらいだと思うけどな。ほら、俺の方が何かと助けられてばかりだし」

君はきつと、私がそういう言葉の数々にどれだけ救われてきたか知らないのだろう。君が私を救おうとしないことが、私を救っているのだ。私は青にも聞こえないくらい小さな声でふっと笑う。そして誤魔化すようにグラスを傾ける。

それからしばらく、互いに黙ったまま時間は流れる。テレビから聞こえる笑い声の隙間を埋めるように、炭酸水のシュワシュワという音が聞こえる。目の端に映る青がゆっくりと呼吸しているのがわかる。それを意識していると、自然と自分の呼吸もゆつたりとしていく。頭が重くなって、こたつの上に出した義手に顎を乗せる。飽きるほど話した後の心地よい疲労感に浸る。やがて瞼が

重く……。

沈黙の時間がしばらく続き、俺はただ時折唇を湿らせるようにグラスを傾ける。その心地よい沈黙に身をゆだねていると、ふと横から聞こえる柔らかない寝息に気づく。ゆっくりと顔をそちらに向け、テーブルに突っ伏している凛の横顔を見る。長い黒髪がテーブルに乗り、毛先は端から垂れ下がっている。彼女は器用に義手の左手を枕にして寝ていた。意外と便利なんだな、なんてくだらないことを考え、一人でクスリと笑う。

左手に持っていたグラスを置く。机に当たってコトンと音を立てる。そして半ば無意識に凛の長い黒髪にそっと触れる。枝毛の処理が面倒だと時々愚痴をこぼす彼女の髪は、黒くつやがあつて綺麗だった。起こさないように気を付けつつ、髪をさらりと梳かすように指を動かす。彼女が起きているときは髪を触ろうとすると鬱陶しがるので、こういう機会でもないと思わせてくれない。元々髪を触るのが好きだったわけではないはずだが、俺はいつからこんなことをするようになったのやら。自分でもわからない。そうしたあとに、また寝顔を見て、それからゆっくりとこたつから出て毛布を取りに行く。

凛にそっと毛布を掛けると、俺はなるべくこたつ布団を動かさないように慎重にこたつに入る。少し冷えた手をこたつに入れると、そっと右の彼女の方を向く。こうして横顔を眺めているときは、なんだか自分が彼女の親にでもなったかのような気持ちになる。実際は助けられることの方が多いのに。

助けられることが多いからこそ、俺は時折不安になる。俺は彼女を亡くした母の代わりのように思ってしまったているんじゃないだろうか、と。一人になるというそういうことを考えてしまう。

俺が母を亡くしたのは中学一年生のときだった。原因は卵巣がんだ。見つけたときには症状がかなり進行していたらしい。最初の摘出手術は成功し、しばらく退院もしていたが、後の検査で手術が難しい転移が判明した。母は化学療法での治療により段々とやせ細っていったが、当時の俺はまたいざれ退院する日が来ると信じていた。しかしその樂觀は裏切られることとなった。俺が中学校に入学して数か月後、母は息を引き取った。最後の言葉は「愛してる」だった。

それからしばらく俺は泣いて過ごしていたように思う。悲しい時間は長く感じられたので、正確にどのくらいの間ふさぎ込んでいたかは定かではないが。そんな俺を立ち直らしてくれたのは父だった。学校にほとんど行けない日々が続いた俺を、時折外へ連れ出した。それは時に無理やりだったが、きつと俺はそれに救われていたのだと思う。隣の県までドライブして何でもないフードコートで食事をしたり、海に行つて釣りをしたり、やや寂びれた遊園地を目的なく歩き回ったり。交わした言葉はどちらかといえば少なかったが、言いたいことは十分以上に伝わっていたと思う。

父のおかげもあつてか、俺はそのうち日常に戻つていった。不思議なことに、どうやら悲しみは永遠には続かないようだ。劇的なきつかけはなかったが、俺は徐々に立ち直つていった。でも、不意に誰かを失うかもしれないという思考はずっと付きまとつていた。今でもそうだ。

俺は軽く息を吐き、こたつから出した手でリモコンに手を伸ばす。ペットボトルを倒さないように気を付けながらリモコンをつかむ。それを手元に引き戻し、テレビを消す。リモコンを置いたときにゴトツと思ったより大きい音が出て、思わず凜の顔をうかがう。……どうやら起こさずに済んだようだ。このままの姿勢で寝ていると寝違えてしまいそうなのでそのうち起こした方がよいと思うが、さてどうしたものかと思案しながらまた手をこたつに潜らせる。

こうして人と話さないでいると、ついどうしようもないことばかり考えてしまう。過去はどうしようもないもの筆頭だ。俺はさっき凜が俺との出会いの話をしていたのを思い出す。彼女は俺と出会った日に意識し始めたらしいが、俺の方はそうではなかった。むしろ会ったその日は彼女の眩しさにあてられて卑屈になっていたくらいだ。その卑屈から生まれた言葉が彼女を知らず知らず救っていたなんて、とんだ過大評価だと今でも思う。でも彼女が自分の腕のことを説明しているあの時の、あの相手の感情の動きに付き合うことに疲れていることを取り繕うような笑顔に、不思議な共感が生まれていたのもまた確かだ。そんなことを考えていると、連想でもう一つ過去の記憶を思い出した。今思えば、それは俺と彼女の唯一の本格的な言い合いだった。きっかけは、そう……俺が別れを切り出したことだった。

「まず、理由を聞かせて。話はそれから」

彼女は悲しさと怒りが無いまぜになったような声で言った。俺は彼女と目を

合わせられなかった。でも自分なりに考えて出した結論だ。

「俺は凜との今の関係を心地よく思っている。でも、結婚は約束できない。だからこの付き合いを自分では不誠実だと思っている。それをだらだら続けるべきじゃないと思ってるんだ」

「……どうして結婚を考えてくれないの？」

悲しみの気持ちを深めた彼女に対して、俺は誤魔化すように慌てて返す。

「違うんだ、君に問題があるとか言いたいわけじゃない。全部俺の方の問題だ。その、うまく言葉にするのが難しいんだけど、俺はそんなに甲斐性があるやつじゃないし、長い付き合いが得意な方じゃないし」

一人であれだけ悩んで決意したはずのことなのに、いざ自分から切り出そうとすると説明不足にも程があるように感じられる。これじゃあただ自分のせいということにして面倒な相手と別れようとしているみたいじゃないか。そう思ってた次の言葉を考えようとしていると、凜はこう言った。

「……私に左腕がないから？　だから自分で全部養わないといけないと思ってるの？　それが難しいと思っているから結婚はできないの？」

それを聞いて俺は啞然とした。彼女の声色は俺を責めるものではなく、ひたすら悲しみに溢れたものだったから。だから彼女が本気で言っているのだとすぐわかった。

「ちが……そんなわけないだろ！」

自分がそのくらいの気持ちで付き合っているなどと思われているのがなんだか悔しくなって、思わず声を荒げる。その勢いで彼女の顔を見る。彼女は悲しみつつもわずかに自嘲的な笑みを浮かべていた。

「別れる本当の理由が言いにくいのはわかるよ。お金だって、今後を真剣に考えるならお互いの感情と同じくらい大事なことだよ。だから責めたりなんてしない。でも私だって必要ならちゃんと働けるように考えて——」

「違うって言うてるだろ！」

彼女がキツとこちらを睨み返す。別れを切り出してからの会話で、初めて目が合う。

「じゃあなんでなの？」

「だからそれは、俺の方の理由で、結婚してから幸せにできる自信がないんだ」

「違う、それは本当の理由じゃない」

「いや、俺だって真剣に考えてこの結論を出したんだ。何を言われてもこれが本当の理由だよ。他に何があるっていうんだ？ そっちこそ理由を聞かせてくれよ」

俺は凜が何を言いたいのかわからなかった。別れを嫌がるのは予想できた。俺だってこの関係がずっと続けば良いと思ってる。でも結婚まで考えたら、こうする方が誠実だと思ったから俺は決意したのだ。それ以外に一体どんな言葉求めているのかわからなかった。

目を合わせたまましばらくお互いに黙り込む。その時間が俺に冷静さを取り戻させたことで、さっきまで頭に血が上っていたことをようやく自覚する。彼女がこちらを探るように目を見つめる。その時間が俺には数分続いたように感じられたが、実際には数秒だったと思う。やがて凜が口を開く。

「……私が、すぐ死んじゃうかもしれないから？」

俺はそれを聞いて目を見開いた。頭の中で必死に否定の言葉を探すが、どれ

も足りない気がした。そうして何も言えずにいる俺に、彼女は先ほどまでと違って変わって述懐するように続けた。

「君が私のことを自分の母親とどこか重ねていることは、なんとなく察してたよ。でもそうやって寄りかかれるのは嫌いじゃなかったし、きつと君自身もそれを自覚してどうにか乗り越えようとしている途中なんだと思っていたから、このままで良いとも思っていた」

……そこは、俺もずっと問題だと思っていた。まさかそこまでバレているとは思わなかったが。彼女に色々な面で体重を預けていたのは自覚している。だがそれ自体は別れを切り出す決定的な理由ではなかった。

「多分私が左腕を失くした原因が悪性腫瘍だったから、君の母親と重なっちゃったんじゃないかって、今そう思った。ただでさえ身近な人を失くすのを人より怖がってるから、余計にそうだろうって」

そう言われると、なんだか自分の苦悩が安っぽく見られたような気がして妙に腹が立った。でも一度冷静になった後の口からは弱弱い反論しか出てこなかった。

「そんな、わかったふうに」

言った直後、俺はその言葉の残酷さを自覚して自分が嫌になる。

「目を見て」

凜は無意識に目をそらした俺の左頬に右手を添え、無理やり顔を自分の方に向けさせた。さっきまで凜の顔に張り付いていた悲しみは立ち消え、どこか決意を込めたような強いまなざしでこちらを見つめる。彼女のこの強さは美しく、そして俺には眩しすぎる。俺は今どんな表情をしているだろうか。

「君の気持ちがわかるなんて言えないけど、痛いのはわかるよ。だって、私も痛かったから」

その瞬間、俺の中にあつたごちゃごちゃとした言い訳がほどけていくのを感じた。俺は、痛いのが嫌だった。だから痛くならないように、最初から自分と他者に線を引いて、一定以上親しくなるのを恐れていたんだ。身近な人を一人亡くすと、途端にそれがごく当たり前の可能性として人生に入り込む。どう誤魔化したってその不安は残り続ける。

二人は喪失を知っている。けれど決して失うことに慣れているわけではない。むしろ人よりずっと恐れている。どれだけ想像して覚悟していても、否、覚悟したつもりになっても、大きな喪失というものはちっぽけな心の砦を容易に砕き押し流していく。覚悟など張りぼてであるという事実を、俺たちは嫌というほど思い知らされてきた。その痛みを、ずっと覚えている。

「そして、ごめん。私は君より先に死なないなんて保証してあげることにはできない。そんなのは誰にもできない」

そして彼女はその痛みから目をそらさない。耳当たりの良い誤魔化しなどしない。どんなに辛くても、どうしようもないことはあるのだ。彼女はそこを決して誤魔化さない。彼女は痛みを覆い隠そうとしなかった。覆い隠せば歪になることを知っていたからだろうか。俺はそこにちゃんと向き合える彼女の強さを知っている。

「きつと理想的な選択肢なんてない。それでも私たちは諦めと妥協の中で何かを選択して生きていく。私の左腕みたいに、最悪な選択肢しかなくても、その選択肢の中から選ばないといけないときがある。ある側面では今より悪くなる

ってわかってても、何かもつと大切なもののためにそうしないといけないときが人生にはある」

目の前に立ち現れる選択肢は、どれも正解に思えないときがある。そういうとき、答えを保留して、ずっとそのままにしてしまいたくなる。でもどんなに遠ざけようとしても、いずれ答えを出さねばならないときが来る。

「これで私が死んだら、君は私と親しくなったことでより苦しむかもしれない。でもこれで私と別れても、きつと君は苦しいままだ」

凜は義手の左手を持ち上げ、俺の右頬に触れさせる。右手と違って、プラスチックの冷たい温度が伝わる。

「だから、選んで。過去に選ばされるんじゃないくて、今の君が、未来の君が、自分で選ぶの。答えを出すのは今日じゃなくていい。数か月後でも、数年後でもいい。でも、いつか選んで」

そう言い終えて、彼女は両手を離れた。左頬のぬくもりと、右頬の冷たさが残る。

「凜は、すごいな」

俺は口を開くとまず一言そう言った。彼女はもう言いたいことは言い切ったようだった。そして俺の次の言葉を待っているのがわかる。俺は彼女がくれた言葉をゆっくり噛みしめて、自分の結論を出そうと頭をひねる。彼女はそれをずっと待ってくれた。

「まずは、ありがとう。正直こんな話になるなんて俺は思ってた。でも今はとにかく嬉しいんだ。だから、ありがとう」

凜は頷く。俺はまた息を吸って、続ける。

「そして、ごめん。俺はまだ選ぶ自信がない。だから、待ってほしい。でも約束する」

一拍間をおいて、はっきりと言う。

「いつか必ず、結論を出す」

優柔不断な俺でごめん。でもまだ自分がちゃんと人と親しくなれる自信がないんだ。だからこれからの日々で知りたい。凜は今の俺の情けない結論に、満足そうに頷いた。

そんなことがあってからもう一年半ほどが経った。あれから俺は少しずつ変わっていったと思う。自分の恐れを閉じ込めることがなくなった。思えば恐れを自覚していなかったせいで、かえってよくわからない不安に突き動かされてしまっていたのだと思う。時に話し合いながら、時に言い合いになりながら、俺たちは少しずつ成長していった。痛くても、治療のためには耐えないといけないことがあると知った。

それにしても一年半は正直自分でも待たせすぎだと思う。だけど必要な時間だった。だって今はもう迷っていないから。この選択肢を選ぶことにはきつと後悔しないと思えるから。

微かに寝息を立てる凜の寝顔をもう一度見る。ちゃんと眠っていることを確認して、俺は上着の内ポケットの中から小さな箱を取り出す。蓋をパカッと開けると、中には銀色の指輪が収まっているのが見える。決行日は来週末の土曜日、二人で買い物に出かける日の夕食の席で。